第６回松本市アルプス公園自然活用実行会議

令和５年２月１０日（金）13：30～16：40
大手公民館　大会議室

【小山先生講演会】
（発言者：土田）　座長の土田でございます。本日は思いもよらぬ大雪の中大変ご苦労いただいて、本日ご参集いただきましてありがとうございます。

今回は松本市アルプス公園自然活用実行会議の最後の会議となります。また、いろいろたくさん議題もございますけども皆さんのご協力をお願いいたします。

まず（1)、アドバイザー学習会ということで。アルプス公園の北側拡張部は平成 19 年に開園いたしました。それ以来、緑地保全を計画的に行っていなかったため、ニセアカシアが各地で大繁殖しております。アルプス公園の象徴的な里山の風景、北アルプスの展望を阻害し、また生物多様性の低下という状況も見えますので、今回ニセアカシアの問題につきまして、何かお話を伺うことができることができないかということで事務局と相談いたしまして、ちょうど私の知り合いの方がおられましたので、課のほうに打診していただいた結果、塩尻市にある長野県林業総合センターの小山先生に本日の学習会の講師を快く引き受けていただきました。改めてお礼申し上げます。講演に先立ちまして簡単に小山先生の略歴をご紹介いたします。

小山先生は現在長野県の林業総合センターの育林部長でございます。信州大学農学部森林科学科修士課程を終えられ、同センターに勤務されてから長く育林部で研究に従事され、その後指導部に異動され、現場で林業の指導や教育の行進に当たってこられた、林業のエキスパートでございます。主な業務の業績として、植林地の樹種転換におけるブナなどの広葉樹の育成管理、ニホンジカの被害対策、ニセアカシアに関する駆除や樹種転換、外来種対策の技術指導、他多種にわたり、また各種委員会の委員としてご活躍されており、いちいちご紹介する時間もありません。

また、ニセアカシアに関する著書といたしまして文一総合出版からニセアカシアの生態学というテーマで出版されておられます。なお、名古屋大学で農学博士の学位を取得されましたが、学位論文のテーマは日本海側と太平洋側に生育するブナの地理的変異があり、その時限的な変位がブナの成長に大きな影響を与えているということを

解明され、学会でも高く評価されておられます。

本当はこのお話をお伺いしたいところでございますが、またの機会といたしまして、本日はニセアカシアの駆除と里山作りというテーマでご講演をしていただきます。それでは小山先生よろしくお願いいたします。

（発言者：小山）　林業総合センターの小山と申します。土田先生の方から先生と言われますと非常に心苦しくございますけど、学生時代に土田先生をずっと先生と呼んでいた人間ですので、先生から先生と呼ばれると私はどうしたらいいのだろうという状態ではございます。先ほどご紹介いただきました、小山と申します。今ご紹介いただいたように現在55歳になっております。

92年から長野県の職員をしておりまして、現在長野県林業総合センターの方で育林部という林を育てるというセクションの方で勤めております。実際には、先ほどご紹介いただいたように広葉樹の森という部分で、その辺杉とかヒノキとかカラマツは有名じゃない方のお話をしたり、そういうところからそういう森はどうやって作ったらいいのか、というようなお話をさせていただいたりということで、右の方に広葉樹の森作りというふうに関わらせていただいたり、下の方は難しいタイトルになっておりますけど、そういったことをずっとやらせていただいた人間でございます。

今日のお話ですけれども、一応最初にお話いただいたようにニセアカシアの駆除と里山作りというところになるかと思います。土田先生の方から先ほど、アルプス公園の方の北側にはたくさんあり、いろいろやってみたけれどもニセアカシアがいっぱい出てきて困っちゃったよというお話があったかと思います。

実際にこのアルプスに関わっている皆さんからして、そもそも何で駆除したいのでしょうか。この人も植物の1人ですよね。なんで駆除したのでしょうか。

しかも、今回は松本市さんと一緒にやらせていただくっていうことは松本市さんもお金をかけて駆除するかもしれない。皆さんが手を出すかもしれない。

そしてもう一ついただきましたお題は里山作り。どんな里山を作ってくために駆除するのでしょうか。この辺のお話が今日のメインテーマなのかなと思っております。

そもそも私自身こちらの委員ではないので、正直な話これ何と聞いてみたいところです。皆さん何をお考えですか。間違いなく皆さんの今の顔見ていると答えはこうなる。それがわかんないからここ来ているという話だと思うのですね。

先ほどご紹介いただきましたように、私自身はニセアカシアの生態学。現在残念な

がら書店ではもう在庫切れのようでございますけれども、こういう本を過去に書かせていただいたという経緯がございます。その中で、しかも私が書いたところが何かというと、このニセアカシアの除去、ニセアカシアをなくせという担当だった。無くす担当だからお前がやれよってそれは一番わかりやすいことですね。

そういうことでいろいろ見ていますと、ニセアカシアは世の中でどうやって扱われているのというと、環境保全研究所のニュースレターでも、ニセアカシアの駆除の話が出てきて、この中でも、ニセアカシアは駆除すべき存在だよと書いてある。ということはやはりニセアカシアは、最初に私が言う前に、世の中で駆除すべき存在だと大体皆さん思っている。だから今回も、ニセアカシアが出てきたから、困りもんだから駆除してしまうという話になってきているのかな。でもニセアカシアにとってみればただの迷惑ですよね。せっかく松本に来たという話になるのですけど、だから駆除すべきだと、もう困っているから駆除したい。どうすればいいの。

ニセアカシアの情報を書いたのはおまえだろ、教えろ。こういうのが多分一番わかりやすい通りではないかなと思っています。そういうことで私自身書いたのは 2007 年のことですから、今から 15 年も昔のこと。15 年たてば世の中もいろいろ進化しているだろうということで、少しその後の経緯を含めて調べてみました。

あっちこっち調べてみますと、この経済産業省のもの驚く場所で見つけました。2018 年度の環境審査顧問会しかも風力部会です。何かあったら風力発電所を作るのにこれで良いでしょうかという審査をしている部会の資料として、ニセアカシア対策というのが整理されているというのがわかってきました。

私が書いてから 15 年後のことです。その 10 年経ってこういうのが整理されていますよというのがわかったところで、ここに何が書いてあるのかなというのは改めて整理しています。

まずここのとこに書いてあったのはニセアカシアの対策はこうすればいいよというと、大体 5 つの方法があるとか。切った上に根っこを抜いて、土を溶かそうとかです。かなり大がかりなことです。薬使っちゃえばいい。刈ればいい。そうじゃなくて、立っている機能が形成層とか、皮を全部剥いちゃえば、皮をむいてしまえば下から上に水が上がるのが止まってしまうので、養分も落ちないので物理的に枯れるでしょうというこんな方法があると。

ニセアカシアをどうにかしなさいというと切る、抜く、薬撒く、とにかく刈る、草刈りをするなどこんな方法が出てくる。これやるとどうなるのでしょう。ものすごく

簡単にやってみると、切ったらどうなるか。切ったらまた出てきます。また何回も出てきます。最終的には根っこをどかしてあげないとしょうがない。根っこが簡単にあっちこっち広がった根っこなので、そう簡単には抜けないので場合によっては土ごと入れ替えますって話になり、というのがどうも一番シンプルな答え。次薬をまきます。一番簡単に枯れるのがわかった。ただ、撒く薬に関してニセアカシアだけが枯れてくれるという便利な薬はない。とりあえずかかったものを、何でも枯らすという薬ならありますよと。だからニセアカシアの横に皆さんが大切にされているような草花があっても一緒に枯れます。薬を撒いてしまうということに対する、山の中に薬を撒いてしまうという抵抗感も皆さんおありでしょうか。というのが一つあってまいります。

そんなことしなくても、枯れなくたって、とにかく切らなくたって、毎回出てくるのを真面目に刈ればいいじゃない。草刈りを一生懸命やりましょうというと、なくならないってことがわかります。いくら刈ってもなくならない。それだけやらなきゃいけないので、すごく人手がかかる。単純に終わらないので長期戦です。こういう方法の中でもう一つ出てきたのが、だったら立っている木に栄養が行かなきゃいいから、クルッと全部剥いて枯らしちゃえばいいじゃない。15 年から 20 年ぐらい前に実はかなり流行りました。この結果どうだったのか、全国の結果もそうですけど、私自身も少しやってみました。1 回目ですごい実は成功する。1 回目は成功するけど、2 回目から失敗する。ということがわかってきました。だから、こういうことをやると効果はすごく小さくて、最初だけやれるので、出来た気になる。こういう意味でいくと、環境への影響がなくて簡単にできる方法はない。10 年前にも私自身がお話させていただいたのは、主にこの辺の方法を全部やってみたときに、やっぱりどうしてもなくすなら薬しかない。あとは大変だよというのをやっていたのですけど、10 年経ってもこの結果は変わらなかった。やはり現在もこの辺の影響は変わらないのでしょう。

そうすると、ニセアカシアを何とかしましょうというふうに考えると、環境への影響は全くなくて簡単にやれる方法はないよということです。だから今日呼ばれているというのはその通りになってしまうのですけども、そういうことがわかってまいりました。ニセアカシアを何とかしましょうというと、金か人がかかるのです。誰が人と金を出すのでしょう。ここに、仮に税金を使いますとしても、皆さんのご要望で税金を使いますという話をして、これだけ税金の使われ方がうるさい時代になってきています。難しい時代になってきています。

私自身も県の職員をやっているからよくわかるのですけど。森にお金を使ってくだ

さいと皆さんから500円いただいておりますが、その使い道どうなのと私自身もよく聞かれます。あんなことに使ってどうするだとよく聞かれるのですけど。いや私がそう思っているから、しかも、今日私がここに立ちました。小山先生がああ言っているからいいよねって言って。今日ここに40人ぐらい、3、40人の方がいらっしゃいますけれども、20万人の松本市民の皆さんが、小山先生が言ったから間違いないのだと言って、どこまで信じていただけるのか。こんなおっさんが言うことなんか信じてもらえないとは思っています。そうすると、アルプス公園に関わっている皆さんがアルプス公園でそういう問題になっているとすれば、一番大切なのは、本当に必要なことを皆さんがきちっと認識しなきゃいけない。少なくともここの委員の皆さんが、駆除が必要かどうかを判断して、私自身も松本市の森林再生の方の会議に関わっていますけども、松くいどうするというので始まった会議ではあるのですけども、そのときに松くいの駆除ってどこまでするの。どうすればいいのという話。

今やっている会議は、その後どうするのというのをちゃんと考えていこうというとこです。だからここは、やはり向こうの会議私が関わらせている会議もここでも一緒だと思うのですけど。その後どうしていけばいいということを少し考えていくのかなというふうに思います。最初もそうだったのですけど、ここからが本番です。

改めて、ニセアカシア何で駆除したいのかな。その後どうするのですかね。今回の実行会議を持っていて、提言書ができてくる。それに基づいてこれから松本市が動いていくよって話になってくると思うのですけども。そうすると、松本市にお預けになって、渡辺さんたちの方にもお仕事がお預けになられたとしても、その後市としてもずっとそれを説明していく責任。そして、先ほど土田先生の方からお話があった、平成19年に計画を立てたけれどもそれからうまくいかなくて、今に至っているとすれば、それがずっと続いていかなきゃいけない。というところがすごいポイントになってくるじゃないかなと思っております。だから、今日のお話のメイン。こちらになるかと思う。最初のタイトルからいきなり変わりました。ニセアカシアはどういう生き物だろう。それを考えた上で里山作りを少し考えていきませんか。お話の中身としては一緒ですけれども、駆除というのが最初にあるのではなく、駆除するためには相手を知らなきゃいけない。こういう子だからこういうことができるよね。だからお金と人をかけなきゃいけない。かけないならこうするよねということを少しやっていきたいなと思いますので、今日考えてきた。ニセアカシア＝駆除だと、世の中でいっぱい言われているけれども、彼らも別に駆除されたくてここにいるわけじゃないし、ずっとこ

こに住んでいるわけではない。彼らには彼らなりの何かがあるだろう。そうすると逆説的にニセアカシアは悪者だろうかというのを少し考えてみたい。

それから里山作り、大体よく聞くセリフです。どういう里山を作っていくのかな。この辺を少し最初のお話の、今日のお話のメインということで、いただいたお時間を使いたいと思っております。ですので、主に今日お話をさせていただくのが前半、多分全体の3分の2ぐらいがニセアカシアというのは悪いやつなのというお話。こうやっていると小山はニセアカシア愛好者じゃないかとか、あいつ好きなんじゃないかとか。本当は駆除したくないじゃないか。ニセアカシアの除去をかけながらおかしいだろう。なるかもしれませんけどそういうつもりではございません。冷静にやってみます。

それから里山作りの話をそれ付けていこうというふうに考えていきたい。まず相手になっているニセアカシアというのはこういうやつですよ、と見たことがある方がいっぱいいるかと思います。別名ハリエンジュと呼んでおります。マメ科の大きくなる木で北アメリカ生まれです。日本のものではありません。大体外国原産だから悪いやつと言うのですけれど、外国原産が悪いやつならそこらにある、いろんなお庭のお花だとか、それこそお野菜で使っているトマトとか、キュウリとか、みんな日本原産じゃないので。外国原産＝悪い奴というとかわいそうになってしまいます。

長野県はどこにでもいて、実はこれを皆さんは何と言っているかというとニセアカシアと呼ぶ方がいなくて、大体アカシア。これ何でわざわざここに、英語の学名というのですけど、これをくっつけたかというと、ニセアカシアは世界共通の言語ではロビニア・フセイド・アカシアという。ロビニアにあったては、これは、私でいう小山みたいな名字の部分ですけれど、これはロビニア族という、ハリエンジュ族ってグループですけれど、問題はこちらのお名前。フセイドは「よく似た」というラテン語です。後はアカシアというのはアカシアによく似たと書いてある。これ直訳しているのですよ。よく似たアカシアだよね。だから偽物だという日本人的な発想でこう呼んでいるのですけれど、そういう植物です。ただ、アカシアは別の植物があるのでこういう名前がついておりますがそんなやつです。アメリカ原産だよと言いながらどうやって日本に来たかというと、実はアメリカ直輸入じゃないです。それがこのニセアカシアの面白いところです。元々アメリカの東海岸の方にいっぱいいたのですけれど。これが17世紀にヨーロッパへ渡っています。ヨーロッパで渡って、ヨーロッパにいっぱい植えられていて、明治の頃にウィーン万博に出て行った人が、これはいい木だと、

持ち帰った。ただみんながいいねと、ヨーロッパから輸入して来た。少し面白い木ですよね。アメリカ原産で、アメリカで行って日本人が言ったからすぐ持ってきたのではなくて、ヨーロッパでした。喜んでヨーロッパで見たニセアカシア。それはいいと、日本に持ってきているという。快適に世界一周旅行してこちらに来ているという面白い植物です。そういう意味でいくと、実はニセアカシアは皆さんに評価されている。アメリカ原産でなぜかわからないけど、突然日本にやってきて、みんなが困っているというのが、松本の、あの山の中にいるマツノザイセンチュウというやつです。誰も知らないうちに喜んでもいないのに偶然持ち込まれてしまって、今の松本で困っているのですね。同じアメリカ原産ですけれど、この人はヨーロッパまで持ち込んでいて、みんなが喜んで、なんか綺麗だよね、緑の葉っぱが綺麗だよね、公園にいい。それからどんなところでも育つし、マメ科で空中の窒素を固定してくれて肥料になってくる。痩せたとこで育つし、成長早い。そしたら山の災害防止にいいよね。だから皆さんがいいと思っていた木。そこが同じアメリカ生まれでも、松を枯らせてしまうマツノザイセンチュウと違うやつ。

　ところがですね。私達の生活を考えていくと大体皆さんがよく知っているのがこれですね。アカシアはちみつ。パルコの近くにあるお店のホームページから少し抜いてきましたけれども、聞くところによると、この中信地方ではこのアカシアの蜂蜜がほぼ主力だと。ほとんどだと言っています。ということは、ニセアカシアが長野県の松本からなくなると、あの会社潰れると。それから 5 月の終わりごろに天ぷらそばを食べに行くと大体これが出てくる。ということはあれがなくなると、5 月の終わり頃山菜が終わった瞬間に山菜天ぷらができない。一方で木はどうなのというと薪にすると結構使えるよね、と若干臭いはあるけれど、喜ばれるかと思いますし、床材に使う。それから私どもの林業総合センターでは、木材を黒っぽくて綺麗だからとワイン樽を作ってみようとかですね。こんなことをやっているという。しかも比較的硬くていい木なので、実は私 20 年前に家建てたときに使ったのですけれど。20 年経っているのですけれど傷がつきません。台所に敷いたのですれけど、お皿を落とします。と皿割れるのですけれど、ニセアカシア床が傷つかない。杉だとすぐにへこんでしまったりするのですけれど、そういう比較的良い面もある。だから私達の生活にとってプラスも多い。そうなってくるとなんで駆除するのだろう。これもいろいろなところからしっかり調べてみました。こういう理由で駆除したいのだと。川に倒木した木で塞いでしまうということが問題。それから人によってトゲが痛い。タラはいいの。それから

リンゴの炭疽病に関してはどうもこいつが中間色素？触手？になっている。じゃあ、リンゴがいっぱいの長野県は困るけど、蜂蜜とリンゴとどっちが好きという。また、難しい話になる。もう一方で、どんなところでも育ってくれて、空中の窒素を肥料として持ってくれるのですけれど、逆にそれが多すぎて川を富栄養化してしまい、マイナスじゃないか。それから、一番よく言われるのが先生の方からも先ほど言った、生物多様性に影響があると他の植物と喧嘩して元々居たやつを駄目にするじゃないかという話がよく言われている。こちらの方は様々な議論があると思います。川の中に木が倒れれば当然河川塞いでいますので。木がない方がいいよねという話になってきまして、病気になるとどっちが大事と。さっきの話になってくると思うのですけれど、特に最後。他の植物と競争して困るだろうと。その中で出てくるのが、ニセアカシアはほとんど植えてないのに気がついたらニセアカシアの山になっちゃった。よく聞く話だから、元々いた植物を駆逐してしまうと、これ普通の里山のコナラの林の写真なですけれども、こちらニセアカシアだらけの牛伏川。下草が全然違う。だからこっちの方になっちゃう。これを、少し真面目に調べてみました。大体皆さんこれ見て、在来植生がなくなっちゃったとよく言われていたのです。

調べてみました。とにかく全国の諸枠のニセアカシアが困ったものの原因というのが、なぜか松本市内です。明治時代に、荒れた牛伏川で作法工事をやるために、さっき言ったように、どこでも育つからとニセアカシアを植えたと。調べてみると植えた木の全体の 3%しか植えてない。それだけ少ししか植えていないのに 75 年たったら大半がニセアカシアになっちゃったという報告が出ています。これが大体ニセアカシア悪者説の主力選手です。松本の牛伏川で何が起きたのだろうかということで少し真面目に調べていました。要するにこうなっちゃっている。だから現在でもニセアカシアから他の木に変えるという事業をすごいお金をかけて松本奈良井川改良事務所さんがやっていただいています。かなり進んできているので。これ昔の写真です。樹種転換するために木を切るという作業をしてくれたので、切ってくれれば木に書いてある年輪でお前は何年に生まれたのかわかるわけです。今こうやって私が立っていると最初に 1967 年生まれと言わない限り 55 歳だってわからないわけです。ただ髪の毛の色と、髪の毛の抜け具合から考えると私自身かなりもう少し上だろうと言われそうですが、切れば確実にわかるということで、切り株も一緒です。切り株を切って何年までか調べたのがこちらです。片端から、上から下までひたすら歩いて調べました。面白かったです。牛伏川の明治時代にニセアカシアを植えましたというところで、一番若いも

ので昭和10年より若い木は1本も出ませんでした。そして、一番主力選手は1960年頃ばかり出てくるのです。普通だったら若いのがいないのはわかるのですけれど、どこかがピークになったらこうなるはずですよね。人口ピラミッドもそうだと思います。ある年齢からいきなりいなくなる。徐々になくなる。そこから全くなくなる。ここが変です。何か大きいのから、小さいのまで私適当にやったのかなと、大きさを見ていたら、大きいのから小さいものたくさん取っている。大きいほど年齢が高いのはわかるのですけれど、大きいからといって、年を取っているからといって、太いのばかりじゃなくて細いのも。太さと大きさとばらつきが大きくなるだけでいつまでたってもちっちゃいっていうことで、大きさとあまり関係ない。だから太いから年とっているとかそういうことはどうもなさそうだけれども、年輪を見ると明治どころか戦前の個体がほとんどないと。おかしいぞと。植えたよな。（当初植えた）3%どこいった。そして歩いていくと、この牛伏川が不思議です。時々こうやって炭窯が出てくるのです。明治の時代に山に木がないから砂防工事しました。緑にしましょうと言っているのに炭窯が出てくる。誰が切った。炭作るような山じゃないです、あんな山。ハゲ山に炭窯がたくさんある。そして歩いてみると、土を掘ってみると、なぜか炭の色をした黒い土がたくさんたまに出てくる。おかしいなと思い、そういう土を取ってきてその中に入っている種を調べてみると炭窯の痕跡のあるところの種の数が何もないところに来るとやたら少ない。しかもこれ別の山です。茅野市の別の山に行ったのに比べると、牛伏川、やたら種がたくさん出てくる。ニセアカシアの森の中にやたら種が多い。しかも炭が墨色しているところがないと、すごく種が多いのに炭のところが少ない。歩いて行くと時々焼肉とかやる会場ですから、焼き肉を放置した人たちがいるのです。悪い人たち。そういうところに行くとなぜかニセアカシアの種が大量に出てきます。これ1センチです。10センチぐらいの間にこんなに種がある。ニセアカシア実は種がなった種がずっと土の中で寝ています。傷つけるかを燃やすと芽が出てくる。だから種が、芽がたくさん出るということは傷がつけられたか燃やされたか。誰かが何かするとぱっと芽が出る。そして1940年より昔から植えたはずなのにどっか行っている。ベースから出てきている量が1平米に3000何本。すごい数の種が寝ているということ。どんどん訳がわかんなくなってきます。しょうがないのでたくさん聞いてみました。事実としてわかっているのは明治の終わりに緑化するために3%を植えたこと。そして昭和9年か10年だったと思いますけれども、牛伏川の緑化が終わりましたという報告書が出ています。そこで当時の建設省の幹部の方が、牛伏川が緑になったと。緑化で

きて素晴らしい山になりました。そういう報告を書いている人がいるわけで、木がないわけないので、木はできたのだろう、森になったのだろう。調べていたら不思議なことがあります。昭和10年の後半ちょうど戦争が始まるか始まらないかの頃から炭焼きをやった人がいるっていうふうに地元の方から聞いた。松本市内田の方にお聞きしたらそう言っていたのですけれど。ただし市民が炭焼きをやったのは山辺の衆だったのです。地元の人じゃなく山の反対側から山越えて、山辺の衆がやってきて山の上からずっと炭竈やっていた。だからこの1945年、30年代の切り株がないのはわかる。森になったから山越えて、みんなが木を盗みに来て、片端から炭にした。だから1930年代とかあの辺の切り株がないのもその通り。その前に切っちゃったから。そして、このお話を伺った方に聞いたら、俺が昭和30年頃に街で売っていたと言うのです。さっき1960年頃の切り株ありましたよね。生まれたやつだ。その頃にちょうど地元の内田の方が薪で売った。このときに山辺の方が炭で売り、このときに内田の方が薪で売るということは、昭和の頭にできた緑を20年も経たないうちに1回切って、また20年も経たないうちにまた切って、このくらいの短い間隔で切るとニセアカシアばかりになっちゃった。さっきの種がいっぱいある。切って、もしかしたら炭で燃やせば芽が出る。そういうのをひたすら繰り返したということで、わかってきたのはこういうことです。牛伏川というところに関しては、古い資料でも江戸の終わりぐらいに馬鹿みたいにみんなが木を切って禿山にしちゃった。だから困って砂防工事を入れるようになります。砂防工事をしたときには普通の森が戻りつつあります。戻ったと喜んだら炭使っちゃった。また戻ったら薪切った。今に至っているという話ですけども。そこにニセアカシアを考えていくと、このときに3%しか植えていない。20年ぐらいで森になったときに早く伸びて大きくなるニセアカシアなら慌てて切られたので、前よりも少し元気弱くなった。20年に1回ずつこまめに切られるうちにニセアカシアにとっては幸せな空間ができて現在に至って性転換されたから少し今減っているのか。そうすると、ニセアカシアが勝手に植生を汚染したのではなくて、私達が好き勝手に短い期間で切りまくったことが、あそこのニセアカシアを増やしたのだねというのがわかってきた。他の在来の植生があるところからひっくり返って、ニセアカシアを邪魔だ。お前消えろとやったわけじゃどうもなさそう。悪いのはどうも人のせいじゃないのかというのが見えてきます。本当だろうか。ニセアカシアは実は明るいところが大好きですよというのは2002年。このときに移っていそうな人もいらっしゃる気もしますけれども。山火事が起きた浅間温泉の山で山火事が起きました。このときにここでニセ

アカシアがどさっと出たというのがかなり話題になったと思う。ニセアカシアはこういう明るいところ好きです。しかもさっきのように燃えたら芽が出る木です。幸せなわけです。ここで大量に出ました。だからこんな環境を作っていけばニセアカシアが出てくる。明るいところが好き。ということは、こういうふうに切っちゃうとニセアカシアだらけになっちゃう。これがさっきの牛伏川と同じことが起きるのかなと思って少し気にしていたのです。ただ、ニセアカシアがたくさん出たところでこれだけ燃えたのですけれど。この辺だけです。点々とありますけれども、こちら側の方からはあまり見られない。この辺に当たる。ここというのが浅間温泉のすぐ上の山田側というか、小屋側があってからなですけれども、この二つは明治の頃からよく崩れていて、水害を起こしていたというのが本にたくさん書いてあります。だから、一番この辺の温泉街がある人たちにとってはこの川が崩れるのが困る。だから、実際にこの証拠がないですけれど、砂防のために植えたのではなかろう。種がここらに、散りばめられたところに今回の山火事があって、突然増え、芽が殖えたじゃないか。というふうに考える。ただそうなってくると、この 170ha 全部ではないので、少しは頑張ってみんなで草刈りしましょうというふうには小学生の皆さんとお話をします。ここでも薬使ったら消えますよとご相談したのですけれど、いや温泉の裏で薬は使いたくない。その代わり私達頑張って草刈りするからということでこうなります。草刈ってどうなったのか。山火事だとずっと 3ｍぐらいですけれど、草刈りするからと切ったらすごい。夏ぐらいに上がるので、また切る、切るとにかく繰り返していて、3 年から 7 年まで 5 ヶ年ぐらい、年に 2 回から 3 回、皆さんにアカシアを刈っていただきました。
どうなったかっていうとゼロにならないのです。一方で、やっと上に他の木が伸びてきました。コナラという普通に里山にいる木が伸びてきたのでそろそろもう 5 年もやって疲れたからやめようとやめた。だけどニセアカシアが残った状態で止めました。どうなったかというとそこから先の写真です。コナラが生えています。これここ混みすぎたので少し切っています。明るくしました。そこからまた少し暗くなっていますけど、こういう状態になってきてというのが今ですけれども。アカシアいません。ゼロにしていないのですけど、アカシアは大きくなれずに徐々に消えてきている。今でも道の外れのところで、明るいとこに 10 センチ、20 センチのちっちゃいやつあります。でも大きくなれないままです。山火事にしてしまった後にはわっと大きくなったのに。1 回他のものが上を覆い始めたら出てこないってこと。すごくわかりやすいですね。現在の浅間温泉の裏山ですね。温泉街の方から見ていますとコナラの綺麗な山

ができています。でもここにアカシアが上を覆っているところが少ないです。ほとんど見えなくなる。そして、種を見るとあの中にもたくさんアカシアの種寝ています。最近私は不発弾というふうに呼んでいますよ。不発弾がたくさんあるのですけど。今の状態では芽が出ることはない。ということは、ここでこれも事前に浅間温泉の本郷の方でお話をさせていただいときにお願いしたのが、このまま火を出さず、明るくしなくて、静かにほっとけば不発弾はそのままずっと維持できるでしょう。山火事やめようねというキャッチコピーができる。アカシアの不発弾は何年ぐらい生きるのだろうか。何年じっとしとけばいいのだろうかというと、まだわかっていないです。私自身も自分でそこまで育てる勇気はありません。単純に 20 年は堅いと思います。もしかすると 50 年かもしれません。そこまで残念ながら私そろそろ寿命はないです。誰かが引き継いでくれるならやってもいいですけど、そこが難しいではないかなと思っています。だからこういう状態を何十年か続けていただいて、アカシアを何とかしなきゃいけない。わかったことはこういうことです。ニセアカシアはどんな子というふうに考えればたくさん出てくるよ、あっちこっちではびこるよと言うのですけれども、大事なことはこの浅間温泉のここで出てこなかった。こういう木漏れ日が当たるぐらいの山だったらニセアカシアは元気になりません。そして、昔にニセアカシアが生えていた場所には大量の不発弾を眠らせています。不発弾に火を付けるとこうなります。暗いとこでは育ちません。土の中に種は眠っています。これを全部除去するというのも最も大変ですから、でも静かにしていてあげれば全然悪さはしませんよということ。だからニセアカシアが困ったなとお山で考えるべきことはすごくシンプルです。むやみやたらに明るくしないということ。そして出てきたらあっという間に大きくなっちゃうから気をつけなきゃいけないよねということです。さらにちょこちょこやっていたとしても、それを短いスパンで何回も繰り返してしまうとアカシアが増えてしまう。牛伏川がやった事例です。昔の方がそうやって手入れをしたらアカシアがいっぱいになっちゃったのは、何回も繰り返して短い間隔で切っちゃうというのをやると増えちゃうよということ。一方で、森がきちんと維持されている森の状態である下が暗い状態で頑張っとけばアカシアは増えませんよ。例えば川の中で多いけどれも、川なんかいつも明るいです。暗くできないですよ。川暗くなったら、汚水出たとき困りますから。一方で川の土が一遍に流れてしまうような、昔はそうやって土砂がみんな下に流れた。そういうことしなくなれば当然、上だけが消えていく、いつも明るい状態、それがニセアカシアにとっては素敵な状態ですよ。私達が生活するのにそんなよく土砂

が来てもらっても困るので、私からすれば川は穏やかに流れてほしいですけれども、そういうところではどちらかたというとニセアカシアが好きな川になってしまう。ただ、山に関して言えばそんなひたすら明るくしたときに要注意ですよということをきちんと意識しておけばいいよねという、彼の性格がわかっているから動けるじゃないか。これだけもめているニセアカシアですけれど、元々の原産地どうなのというと、実は元々の原産地では20年くらいでこのアカシアを食い殺すカミキリムシがいる。別に大きくなれない。普通はゆりの木と言われる、インディアンが丸木舟を作るような大きな木に変わるという。アカシアが倒れる、倒れると騒ぐのはどうも育ってから30年経ってから。30年までは根っこを張りまくり土崩さないという。でも、原産地ではその前にカミキリムシが悪さして殺しちゃうので、彼らにしてみれば20年生きるための戦略しか持っていないのです。全国各地でいろいろなのを調べていっても100年生のアカシアはまだ見たことはないです。北海道でずっとそういうまっ平らなところで壊れないようなところで、ひたすら調べた人がいますけれども、彼が調べても100歳がなかった。だから真面目にアカシアが出てきて困るような山は100年アカシアを我慢すれば消えていくのにどっかで嫌になって私達が若返らせている。そうして、実は私は困ったと言っているのですけど。アカシアというのはこういう木だよ。30歳になったら困り始めて、その都度ゼロに戻してあげれば100年前から困っている。明治のころからずっと困っているというふうに言われているのですけど、牛伏川でもそんなに生きられないので本来は、初代はいないはずです。初代がいなくなれば、登りは消えたはずなのにそこは町が欲しかったとか、困ったからではないですけれども、同じことをやってはいけないじゃないのかなというふうに考えております。だから松本で考えていけば、わたしたちからすれば蜂蜜すごい私達にとって必要な資源。そして、松本にとっても大事ですけれど実は日本人。一番好まれるハチミツがアカシアですね。だから中国産のアカシア、次はハンガリー産のアカシア。日本人が蜂蜜というとアカシアの蜂蜜が一番売れています。ということは、アカシアをなくすことは松本にとっても不幸ですし、私達にとってもよろこばない。これが正しいかどうかわからないすけど。うちの妻は年に1回これ食わないとどうも春が終わらないらしいので、そういう方々もいらっしゃるのだろうということで、私達の松本にとって結構大事な存在ではないか。ある程度いてくれてもいい存在。そして一番いろいろなことを言われる生態系の影響に関しても、実は私達が彼らを理解してないばっかりにやらかしているのかな。アカシアが来てから100年ぐらいなっています。確かに川に関してはいろいろ

な植物に悪影響が及ぼしていることがあります。彼らにしてみれば川は明るいので、光合成するのは致し方ないですけど、山を同じようにする必要性はあるのかというのを考える。土田先生はずっと天竜川でお調べになっていることからすれば、川に関しては、当然川が流れを緩やかにして元々そう言って、自生の植物との共存する意味ではとてもマイナスだと思いますけれども、同じことを山に持ち込まなくても良いのではないかというふうに考えております。考えてほしいことというのはさっき言ったように100年しか育てない短いやつです。100年。私達の人生より長いので何が短いか言われそうですけれども。縄文杉は1000年経たないと縄文杉と呼べませんと言われています。それから先ほど先生からご紹介したブナとかも牛伏寺に生えているようなやつは200年生きています。というふうに考えていくと彼らが100年生きられないというのは短い期間です。そして、暗いところでは育ちませんというとてもありがたい資質。ただ種をずっと残っています。繁殖力がめちゃくちゃ強いので減らそうと思ったら手間とお金かかる。なんか大変。しょっちゅう遊んでいるし、何かやらかすとこいつらが元気になるということは、私達が、ニセアカシアがいるところで森作りをしていくときには、普通に考える〇〇市5ヶ年計画とか10ヶ年の長期計画っていうレベルではないじゃないのかと。20年の計画で動いていたら失敗しているので、もう少し長いスパンがいるよねという話になってきます。そうすると、ここから初めて山作りに変わっていけるのかな。どんな山作りをすればよいのか。今回は里山作りという話でしたけど里山ってなにと言われれば、ここからここまで里山です。松本の街の中から美須々湖までが里山で、そこから奥という定義はないわけです。何かと言えば、私達が自分たちの暮らしに使ってきた、自分たちと一緒に仲良くしてきた山のことを里山といいますので。人によってはアルプスの山頂の方もいらっしゃいます。美ヶ原の上の方もいらっしゃいます。いや、アルプス公園だって億という方もいらっしゃるかもしれない。人によって定義は変わってくるというのが里山の定義になります。ただ大事なことは里山というのは必ずそこに人が関わっているということ。自然な状態では誰かが関わっている。関わる人というのは必ず私はこうしたいというその人の思い。何もしないも含めて思いがある。自然は自然でさっきのように明るいのだったらニセアカシアが出てやろうみたいなことをやらかしますから、人の思いと自然の営みが交錯している。常に里山に関しては全部人というのがキーワードになってくるってことは私達がどうしたいというのをちゃんと反映する場所だと。元々里山というのはどういうのなのというと、一番よく聞く里山＝多分この一言です。おじいさんは山へ芝刈

りの、おばあさんは川へ洗濯にと出てくる桃太郎の最初の一節。本来の一般的に私達が生活に使っていたと。山へ芝刈りに行くための山を里山と呼んでいたのです。芝刈りは何となると思うのですけれど、昔は全ての生活物資を燃料、こういうふうに寒いときの暖房なんかも全て山の薪、炭なんかを使っています。そればかりではなくて、畑に入れる肥料そういったものを全部山の資源を使っています。実際どれくらい使っていたのかというと、昔江戸の頃から今もそうですけども元肥大体 10a の田んぼ畑に 3 t 使っていました。これぐらいの費用が要るのですけど、山の落ち葉を 1ha から持ってくると 5t ぐらいということは、1ha の森を持っていると 10a の畑が作られる。そしてそこの出てくる燃料はさらに別にいるよね。薪にこんなに積んで、一冬で使う話になってくる。だから私達にとってみれば 1 t の小さな田んぼや、畑を作るために 1 町歩の山が必要で、それ以外に燃料の山が必要でしたらかなりいりますよね。そのくらい私達は山から支援をいただいてきたということが言えるのではないでしょうか。いっぱい使うわけです。使うとこうなります。これ昭和 10 年の浅間温泉茶臼山という、絵葉書の写真です。嘘ついていないです。浅間温泉名所茶臼山公園という絵葉書が残っています。ここどうなっているか。さらに、古いやつを遡ってみます。江戸時代の話。これ場所わかりますか。ここに今、高速道路が通っています。この辺ではないです。長野市松代です。長野インターですけれど。長野インターの裏山を江戸時代に終わりに絵師が書いた絵です。正確でした。ちょうどここ映っているところで、150ha 分の山が見えるのですけれども。そのうち何も生えてない、こういう禿山になっているところを全部足しますと 10ha ありました。そこ草だけになっているところもあり、ここも多分草山ですね。そういったものを計算していきますとこうだと。さらにお山の木に対してお庭に大きい木があるのです。これが松代藩の古い資料を見ますと直径 10 から 60cm と書いてあります。これらに比べると山の木は小さく書かれていますというのが少しずつわかってきます。江戸時代もこうやって山の姿をすごく細かく区分けしていた。このような形で細かく、細かく山を管理しています。それだけ、それぞれの方が欲しい山が多かったのでしょうというふうになるかと思います。だから、この頃は皆さん、おじいさんは山へ芝刈りのように毎日のように山に行って、草を取ってくる。薪を取ってくる、何もできないとこもできちゃったというのがこの時代なのかなと思います。こういうのをずっとやっていたのが燃料革命で使わなくなって、どうなった。茶臼山さっきの写真ですね。松くいが起きる前なので 10 年ぐらい前の写真ですけれども、ここにあるふにゃっとした木がここに綺麗に残っていました。80 年か

ら100年で草も生えてないようなこういうところが80年ぐらいたって草が生えてきて森になっています。昔ここに、北アルプス見えていたのですけれど、全部は見えない。このくらい森に変化をしていく。私達が使わないと自然に森に戻っていくということが起きています。それも、ニセアカシアを取り続けた牛伏川も同じですよねという話。使い続けた頃はよく使っていたから木がなかった。使い倒せば倒すほど、土地は痩せていく。そこから何もしなくなったからここではアカシアが多くなっちゃいましたけども、何か森ができてきたということは一緒だよね。今度は、このまま大きくしたらどうなるだろうか、ここはニセアカシアが困るからですけれども。そのままほっといたというのが最近都会でよく見られます。これ東京のとある保全地域の問題。斜面全体に大きな木が増えてきて、木が大きくなりすぎて太くて、手が出せない上に細い木が何にもなくなって枯れ木が出てきて、それがお宅に落ちてきて困る。こういう現象が出てきています。しかもみんなが満員電車に入れられたように入っていて、お互いに喧嘩するときの高さを抑えられず太くなるのでとにかく大根ですね。こういう時どうしましょうかという、時々私もご相談を受けます。どうしたいのと聞くと切れない。切ったらせっかくの緑をなくすからというふうに皆さんお困りになった。里山作りを考えたときに今の話は三つ。重要なキーワード。どれが大事なのか、もしかしたら今回のこの委員会で結論が出ないかもしれません。ただ、ここに関わっている皆さんには知っておいていただきたいのですけど、ニセアカシアがある山の中で昔のようにちょっとでも太くなったら薪にして、ちょこちょこ細かく仕事をするよというとニセアカシアを皆さん元気にしますよ。ほっといたから、大事な森だから残そうというと、どんどんどんどん木が太くなる。お互いに競争したら勝手に枯れます。枯れ木、切れなくなってさあどうしましょう。これはこれで困るもの。都会でよく見る保全の森はこうなってきた。ここまでこれからどうしましょう。そして、大事だから細かく分けようというのがもう一つの考え方です。これも結構大変ですよね。これ同じ位置です。山があって、山があって同じ形です。ここがないのは実は土とったのですね、高速道路にするため、こういうふうに細かい区割りをして、常緑樹だとか落葉樹をいっぱい入れた森が今わーっと落葉樹しかない。こんなに細かく10m刻みぐらいで森作りを入れ替えるような、おじいさんは山へ芝刈りになんて今の時代にできるでしょうか。
それを20年、30年、50年という時間をかけてできるかなというのを意識していただきたいなと思っています。結局燃料にする私のご飯が食べたいからという森林を細かく見ていく目的は今ないと思うのですね。アルプス公園に関わっている皆さんも毎日

365 日アルプス公園に行って、今日のご飯はこの木を取ろうということはしてないと思います。開発をされている、来た、来客した皆様にお話をする。こういうふうになっているよという。あれは明後日切る木です。これは 3 日後に切る木です。決めてないですよね。ずっと大事にしていこう、上手に皆さんに楽しんでいただくということは考えるのですけど、そのときにいつまで誰がどこまで管理するのというのはないので、どうしようかな。これがあまりにも長すぎすると人が変わったときに消えてしまう。気がついたら設計を変えたら、元に戻ってしまう。もしかするとさっきのニセアカシアを増やしてしまう。そうすると一番大事なことというのはいろんなことを考えるのですけれども、それをずっと将来まで残していくというのは結構難しいですよね。こうやってみよう、それも全部細かくやってしまうとかなり大変でしょう。私自身の職場には旧楢川村に試験地があるのですけど。細かく分けた結果、どこにどの森があるか、だから誰もわからない。30 年たった杭もどこかに消えてしまいました。杭も残らない。だから本当に求めている姿はどうでしょうということを冷静に、やはり森作りの中では考えてほしい。一番いいのはこれだよね、でも今の場所はこうだから今はこう使おうとかあっていいと思う。最後の大きなゴールを考えていただく。そこが実は難しいですけど一番大事になると思う。里山は、例えば、本当に生き物のための一番なのか。人が歩けるようにしておくのが一番なのか、大きなテーマが大事だなと。そこにそのつもりで手を入れることになると、そうすると大体半分あたって、半分外れます。あれと言います。いいのです。予想外の方向に変わったのですけど、それはゴールに向かって、前を向いているのか、30 度ずれているのか 180 度ずれているのか、90 度なのか。ゴールが見えれば角度がわかるはず。ひっくり返っていたら巻き戻せばいいです。これは駄目だった。少しずれているのだったらカーブすればいいじゃないか。とにかく今の状態から最後はあっちだねという大きな目標があって、それが全員の共通理解になれば大事だと思います。仕事を始めて動き始めてから、あれ、これで良かった、それで良かったのだっけ。多分前回の計画というのが平成 19 年に建てたときに最後のゴールが結構あやふやだったのかな。動き始めながらこうなればいいなと思いながら本当にそれでいいのかな。ちょっとしたずれは最初の年には小さな角度ですよね。最初の 5 センチが最後になったら数百メーターになるずれになるので、そのときに最終的に私達の生涯を超える時間で、森が動いている以上大きな方向だけを見ていただくことが大事なのかなと思っています。昔の人ってすごいことやっていました。最後になりますけれども。県庁の裏にこういう大きい石碑があります。県の職員

やっていて私自身も途中で教わったのです。今でもあります。これつい2月に写真撮ってきました。明治37年に設置された長野県県有林のことを書いた県有林の木というでかい、ひたすらここに漢文で何百文字も書いてあります。ここに書いてある中で一番すごい言葉は、明治37年に設置された長野県県有林は今から31年間木を植え続けて210年育てて、計画が終了する、そこから80年ごとに森を管理すると書いてあります。嘘つけないですね。石で掘ってあるので、なんてしょうがなく保管していますけれども、明治 37 年に設置されて 31 年間木を植え続けて、212 年木を育てているので、現在、長野県の県有林にはこの道半ば120、30年の計画上の者がいるはずですが、どこにいるかな。自ら謝らざるを得ない事情でただ昔の人はこういうことを石にまで書いて残そうとしある場所は県庁舎の裏ですけど、昔の議会の入り口です。裏には当時の知事の名前が表に書いてあって、裏には当時の県議会議員の名前を全部書いてあります。全員の血判状みたいになったわけですね。しかも議員さんの前なので議員さん皆さんが目にする場所。そこまで気合を入れていたものだったなというのはよくわかります。だから私達が作る計画も実際に私自身もそういう計画を立てるときにこの石碑のようなことをやっぱりやっていかなきゃいけない。森に関してはそういう意識を持たなければならないなというふうにいつも思っております。最後になりますけれどもニセアカシアというものに関しては、今日お話したように、あいつはこういうやつだ。原産地では 20 年しか生きないからわからなかったけど、30 年たったら倒れだす。だけどそもそも暗いところ嫌い。明るくないと育たない。そういうところから来るとの付き合い方を考えた上でどうしていけばいいのかな。じゃ、最終的にどこに持っていったらあそこは幸せになるだろうね。というところからゆっくりバックをして、ここを積みつぶさない、離さない、離さないようにしていけばいいのかなというふうに思っております。私自身も同じような形で松本市の森林再生市民会議というのに関わらせていただいております。松くい虫の問題を契機に松本市はどんな森だったらいいのかなというビジョンをつくるための、3年間の事業ということで動かせていただいております。今年度はまずいろんな現場をきちんと見ましょうということでこれ昨年の12月ですけども山見るということを進めております。今週末には山から出てきた木がどう使われているのかを見に行きましょうということをやろうと思っていますけれども、そういうところから森と付き合おうということをやっております。ここではですね、同じ、やはりこの皆さんもそうですけど、森を考える仲間としてお互いに仲良くできるとこは一緒に行きませんかというお話をさせていただこうと思っています。

今のところ細かい予定まで私自身も承知はしてないですけど3月18日、こちらの市民会議の方が今度は松本市の森林作り、みんなで語るようなフォーラムをあがたの森でやろうというふうに企画をしております。

ぜひ、こういったご提案をこちらの方の提言の方もこういった森作りの中一緒になって入れていただきながら、お互いに音頭をとってうまく連携して進む形ができればいいなというふうに考えておりますので、今日のお話が小山の馬鹿野郎とここで言っていただくのも一向に構いません。事務局を担当する市の職員がそこに来て、あいつ馬鹿なこと言っていたなというふうに言うかもしれませんけれども、それはそれで構いませんので私への文句批判はいつでも受けておりますので、こんな形で一緒に森作りができればいいと思いますので、これからもよろしくお願いしたいと思います。
すいません若干時間長くなりましたけど以上で私の方からのお話とさせていただきますありがとうございます。
（発言者：土田）　小山先生大変興味あるお話をいただきましてありがとうございました。それでは、ただいまのご公演につきまして、ご質問等ございましたらお願いいたします。

（発言者：鈴木）　よろしくお願いします。私がこの会議でニセアカシアのことでいろいろ私なりに考えてみたのですが、今の小山先生のお話をお伺いして、ただ切るだけではなく、それを利用するということを含めながら、伐採をしていく。というのが目的なのかなというふうに改めて考えるように、今日は感じました。実は、急斜面のところなので、確かにニセアカシアが早く育って、斜面を根で守ってくれているというのが事実です。ニセアカシアが無くなったら、その斜面がどうなっちゃうのかなというのも少し心配な部分もあるのですが、でも、そこにケヤキや、ナラ類が繁茂してくれれば、ニセアカシアの代わりにもなるのではないか。あるいはニセアカシアの伐採しやすい部分であれば、それは大きくならないままでも、中木ぐらいの高さで残していくようにすれば、それを薪材だとか、はちみつを取る材料として有効に使うことができるのではないか。だから斜面の場所の、場所、場所でニセアカシアも、向き不向きを考えて、伐採して林宗転換するところは、手間をかけて、他の植生が大きくなるまではそれ以上にならない高さになる前に伐採していく。そして、利用できるところも、あまりの大木になると、ニセアカシアが今度倒れたときに30年以上になって倒れたときに、根こそぎ倒れてしまうので、そこから崩壊が始まってしまう可能性があ

るので、高さを調整しながら利用する林宗転換をするというのを、考えていけたらどうかだろうかというのを、今、先生のお話を聞いて、私なりにこう考えたところです。その辺はいかがでしょうか。

（発言者：小山）　ありがとうございます。一番難しいのが、ニセアカシアの性格で少し今日お話しなかったのですけれども。最初に何も考えずにぐっとでかくなります。この初期の猛ダッシュの高さの凄まじさが一番のニセアカシアのすごいところ。松本市の浅間温泉の裏ですと 2 年で 7m。その後どうなったかというと、20 年経って 10m です。100m選手のように最初は早いのですけれど、一気に化けます。普通のやつは 20 年ぐらいすると同じように 10mになるのです。初期だけを見て、のんびりするタイプなので、今言ったように高さを抑えようとしますと、つらいです。

　だから、本来、例えば在来の植生になってほしいけれどもというのを大きなゴールにしておいて、でも、ここはニセアカシアいてくれてもいいよねという、大きなゴールをニセアカシアはいてもくれてもいいというゴールにするのか、いや、本当は向こうに行ってほしいけれども一時的にニセアカシアにいてくれてもいいとするのか、考え方をニセアカシアがいてくれてもいい森だったらそのスタートダッシュを大事にしてニセアカシアをある程度生かす。

　だから、そっちを使いましょうですけれど、あまりいてくれては困るということが前提であるならば。他の子を優先させて頑張らせるのだけれど、一時的にいる分には諦めるか、そこの判断をし、考え方でだいぶ変わるかな。見た森は一緒でしょうけれども。最初にお話しました、ゴールどこということだと思う。ニセアカシアがハチミツなど利用で使えるから、ニセアカシア大事にしよう。倒れてきて困るとこだけ切ろうという森作りと、本当は在来のものに持って行きたいのだけど、一気に手出せないからやばいとこからやっていこうという森作りとか、途中の過程が全く違うじゃないか。それを見ている方からすればニセアカシアは両方嫌がるじゃないかになるのだけれども、そこが大きなビジョンと、具体的なストーリーの勘違いになるかな。

　特に初期のダッシュの速さだけは少し意識していただいた方がいいかなと思います。

　大体 2 年で種つける。猛ダッシュしている間に種付けて落とすので、不発弾を大量増加する。そういうところもご検討いただければなと思います。そんなところで回答になっていますでしょうか。

（質問者：髙山）　ありがとうございました。大変参考になりました。3 点。1 点目確

認ですけれども、牛伏川の上流の昭和10年と昭和30年でしたかね。炭と薪で切ったと。結局当時は、ニセアカシア自体は材として、その有用材としての認識は元の方は思っていなかったので残しておいたという感じなのでしょうか。

（回答者：小山）　まずそちらについてはニセアカシアを切っています。そして非常に不思議なのはニセアカシアを炭にする場合には、黒炭にするかと思うのですけども、そうではなくて、そこについてはそういうやり方をしていませんので。炭竈の予想からしてもそうではないので、多分本来ヤシャブシとか、本来植えたハギシバリとか、そちらの方のための炭を焼いたという炭が形状から見ていまして、ニセアカシアの炭焼きの仕方ではないので、何でもかんでも焼いていたのだろうと。気にしたときには薪として重くて、硬いのでというお話をされていたので、多少ニセアカシアはあったのだろう。それでもナラが多かったからというふうにもう無くなられた。

切ったと言われた方はそんな話をされていたので、ニセアカシアを切ったけれどもニセアカシアが多かったという印象は持っていなかったというふうに聞いております。

（質問者：高山）　もう1点。いわゆる散布の速度といいますか、川で流されるのは別個にして、風で流されるというものの状態で、自然に拡大する範囲速度も問題となりますか。

（回答者：小山）　数字としては私も持ち合わせておりませんけれども、さほど誰かや鳥が運ぶという可能性が非常に低いものですから、あまり広がるものではないのだと。

実際に浅間温泉のときにも山田側の近く、せいぜい100m範囲のところで横田側が山田側から100m、200mの範囲ではバーっと出たのですけれども。あそこ5年上までにいくと出ていなかったものですから、かなり種筋のちょうど見えるあたりの範囲で収まっていたことからしますと、そんなに種子散布が馬鹿みたいに広がるというふうに考えておりません。

だからアルプス公園に関しても、山が低いので木の高さ分の場合、2倍、3倍としまうと思うのですけれど、その程度で多分止まっているのであろう。ただそれをこういうふうに何回もいろいろなことをやることに増やして繰り返すので、今のようにあっちこっち点々としているのではないかというふうに判断しております。

（質問者：高山）　アルプス公園のニセアカシアは風が勝手に飛ばされたというより、鳥で運ばれたとかそっちの方が強い。

（発言者：小山）　鳥が運んだ可能性もあると思うのですけれど、それ以上に多分、

元々そういうふうに、鞘が弾けるときにぐっと力で飛んでいくのが一番大きいものですから、それで増えたというふうに考えた方がいいのかなと思います。動物系というよりはそういう自然の力によるものだと考えております。

（質問者：高山）　林業総合センターはＤＮＡ解析とか行っていますか。

（回答者：小山）　行っていません。うちにそのような装備がございませんので誰かに頼るしかないのですけれども、他の研究所なり、大学さんにお願いするしかないのでDNA解析となりますとまた少し別の話でご相談をできるかと思っております。

（質問者：高山）　最後少し難しいというか、面倒ですれけど、私も全然わからないけど、生態系の影響でいわゆる周りの植物に影響を与えるという中で、例えば窒素固定で土壌の富栄養化をされるのが問題だとかよく言われるのですが、最近、今季のネットワークが実は森を育てたような、そういう研究が可能だとかいう。ニセアカシアは元々日本になかった樹種なので、材料の樹種との今季のネットワークを作れないじゃないかとか、そういうような研究今どのような状況でしょうか。

（発言者：小山）　多分、ネットワークというよりは土壌中の菌根菌の問題というのもおそらく絡んでいると思うのです。土の中の菌中の絡みはあると思うのですけれども、そちらに関してはかなり研究の方がまだ現在進んでいるのが、植えて育てる系統の樹種です。ナラですとか、もしくは今日の新聞に出ていたようなトリュフのように、金になるものに関してはやはり進むのですけれども。その他に関してあまり進んでいないものですから、非常にまだ研究の方が遅れている。外来種が来たことによって、それと在来の菌根とはどういう関係を持っているかということは、ほぼ誰もまだやっていない状態かなと思います。

　ただ、そいつによって何らかのとんでもない悪影響があるのかということに関しては、私が見ている限りさほどすごいものはないのではないかというふうに私は感じておるところです。

（質問者：山と自然博物館　内川）　お話ありがとうございました。ニセアカシアは陽樹ということで森になってしまえば生えてこないというところでそれはいいと思うのですけれど、どうしてもアルプス公園。やはり里山の開けた部分ということでリーディングが結構多い。そこにニセアカシアがどんどん入ってきてしまうと思うのです。それに関しては、細かく切っていくしかないか、それとも何か低木のようなものがあればそれだけで生えにくくなるのかという。例えばハギなどが植わっていれば、そこ

に生えてこないのであればそういったものを増やす方が、管理がなくなるのかなとか思うのですけれどその辺はどうでしょうか。

（回答者：小山）　基本的に、今生えているものの対応と、次に出てくるものの対応とかで変わってくるかと思うのですけれども。現状で生えているものに関しては切って終わらせるしかないでしょうという話になると思うのですね。

　それは一つ大事になってきます。一番減らせられるのはどうも6月から7月にぶった切るのが一番いい。というのは、植物自身、他の植物でも一緒だと思うのですけども、春先に切った場合ですと芽をふいて、太陽高度の高いうちに荒稼ぎをしようとします。それを、太陽高度は要するに、夏至から先の頃に地下に送ろうとします。その前に自分たちの冬芽を作るための作業をしますので、冬芽をつけている間、どちらかと地上部に栄養付けて固めようとする。そこから夏に向けて下げてきて、地下に貯金しようとするのでその前にぶった切る。林業で下草刈りというのはその時期にやっているのも同じ理屈になってくるのですけれども。

　そういう意味で夏頃です。アルプス公園でしたら、それこそ夏休みでお客さんが来る前に1回丁寧にやってしまうことで、3回もやりましたけど一番弱らせるとしたらそこが一番チャンス。で弱らせることを繰り返していけば小さくなった。次は出てくるのを先にということですけれど、出てくるときに不発弾が出る条件はただ明るいことも必要ですけれども、それ以上に傷をつけるか、何かで、ただお子さんが入ってゴロゴロやるとか何かやらかす可能性があるとすれば、暗ければ、それは私達の目線で暗い必要はないです。彼らにとって芽が出るときに暗ければいいので、先ほどおっしゃられたようにハギか何か小さなものが生えている、ツツジのような目つぶしのあるようなことでも、彼らにしてみれば真っ暗なわけですよね。私達の目線で考える必要はないと思いますので、彼らの目線に立っていただければいいかと思います。

（発言者：土田）　時間押してございますので、これにてご質問を閉じたいと思います。小山先生有意義なお話をいただきありがとうございました。先ほどお話もありましたように、松本市の森林再生会議の委員でもございますし、今後もいろいろこのアルプス公園の森林の管理、あるいはニセアカシアの駆除と様々な課題もございますので、ぜひご助言やご指導いただくとともに、また森林再生市民会議ともコラボして、進めていければいいかと思っておりますので、今後ともよろしくお願いします。それではまた拍手で先生に感謝の意を表したいと思います。

2番目の神澤委員の専門的な立場からの提案ということでございまして、神沢委員からアルプス公園における児童教育についてのお話をいただきます。よろしくお願いいたします。

【神澤委員説明】

（発言者：神澤）　一般社団法人里山保育日向ぼっこの神澤といいます。事業所名は松本シュタイナ認定こども園日向ぼっこという名前で14年前に、梓川の里山を使った保育をしたいということで希望されるお母さん方と一緒に、保護者と一緒に立ち上げた園です。今現在は一昨年4月に波田の方に新園舎を立てて、事業者やっていますけれども、月の半分はバスを使って梓川の方の古民家を利用した園で、子供たち森の中で保育をしています。森だけではないですけれども、古民家と森ということで、最初私どもは本当に荒れていた里山を、クマザサとかを刈り込んで、人が入れるようにし、ボロボロになっていた古民家をお父さんお母さんたちと改築して、そして始めた園です。まさにこれからアルプス公園で森林サポーターとボランティアと里山作りをしようといったようなミニチュア版を14年前にお母さんたち、それから園を応援してくださる近所の方々と一緒に里山作りを始めました。初めはとにかく里山の暮らしの知恵をご近所さんからたくさん教わりました。里山の暮らしの良さというのはこちらにありますように、古来の人は衣食住全てにおいて自然界のものを、工夫を凝らしながら利用して生活してきました。私達子供のおもちゃ、それから外の屋根、全て森の中のもので制作して、そして園を立ち上げました。森の中にあった大きなクルミの木を伐採して、製材して、机を作る、それから竹を切って竹細工でおもちゃを作る。とにかく必要なものは全て手作りということで、必要な資源は全て自然の中にある私達の生活は自然と切り離せないものというところで、そもそも私達が森の幼稚園。里山で園を始めるっていう理念は必要なものは作る。それを小さい子供たちが生活の中で目の前に見ていということが必要だということで、その里山の暮らしの中にこそ子供たちがたくさんの多様な感覚を育てる環境だというふうに思い、森の中で日本古来の丁寧な暮らしそのものを、子供たちと一緒に暮らしの中で保育をするということを始めました。

暮らしが育む子供の感覚ということで、お母さんたちにはとにかく家事仕事、家での仕事です。料理から掃除、お裁縫、そういったものはとにかく子供の脳を育てる指

先を使って、工夫をして、自分のファンタジー、創作創造したものを作っていくというところを親子とともに、子供たちの生活でだけではなく、保護者の方も一緒に味噌を作り、醤油を作り、ソーセージを作り、手作りでやろうということで今も続けています。そういった暮らしが育む子供の感覚は、想像力と創造力を育む多様な運動感覚、道具に合わせた動きを子供が自分の動きを律して、他者に合わせて行動する元になる道具の扱い、それから自然の中には多様な素材があるので、その多様な素材が増えることで多様な人や状況に応じた思考力がそのもとにあるというふうに考えております。

実体験に基づく多様な感覚体験をとにかく親も子も積み重ねていくことは、今14年経って振り返ってみても、もう大学になっている最初の第1期いるのですけれど、自分の人生を創造していく力になっていると思います。今でもその大学生が遊びに来て、ここの天井のところが少し傷んでいるから直してあげるよという男の子や、おもちゃを手作りしてプレゼントしてくれる卒園児がいます。ざっとこれまでやってきた1年を通して里山の暮らしに根付いている行事をしてきています。三九郎、これも近所のおじいちゃん、おばあちゃんと一緒に作っています。それから5月には麦を手刈りで手植えをして、手刈りして、そして田んぼの活動は14年目ですけれど、手植えをして、そして池が利用して、足踏み脱穀で脱穀をして、昭和の初期、昭和4年の東御を使って、風で籾を取り、そしてゴマすり器でも籾を外すとか、そういったことをやっています。そして羊を飼っている保護者のOBがいるのですけれど、その羊の毛を刈って子供たちが代わりに行って、それを洗って、草木染めして、それを糸車で毛糸にして、その毛糸を織機で織るとか。その一連の、とにかく洋服とか全て自然なものでできている。手作りしてできるのだよといったところを伝えたいということで、そういう草木染から羊毛。それから綿を摘むとかそういうことをしています。

そしてしめ縄作りは近所のおじいちゃんがこの田んぼでとれた藁を使ってしめ縄作りをしています。もう大学生とかは本当に上手に縄を綯えるので毎年来ている子とぁ、OBの家にも子供が作ったしめ縄が家に飾られているという。そんな卒園児たちです。

そして近所の人たちと本当にいろんな活動をするのですけれど、餅つき。それからピザ作り、こんにゃく作り、こんにゃくはこんにゃく芋から。3年目でこんにゃくになるよう芋ですけれど。年少で植えた芋が年長には、自分たちの植えた芋でこんにゃくを作る。それから庭にある梅をもいで梅干しと、梅ジュースそんなようなのを作っています。それからご近所の人にそば打ちで来ていただいて、お昼が昼食。打ちたてのそばを食べるとかそんなことしています。一番思い出に残っているのがこの日干し

レンガを作って、竈とピザ釜を作るというのをやりました。写真集に残っているので良かったら見ていただければと思うのですが、近くで明治時代の蔵を100年前の蔵ですけれど、壊すというのを聞いてその土の再生、私達、竈が作れるぜっていうことで、みんなで取りに行き、そして屋根から壁を壊してその土をふるいにかけて、ふるいにかける前に、固まった土を金槌で子供たちと壊のですけれど、明治時代の梅干しとか、クルミとか、本当に地産地消で、そこの地域の土でできている蔵なのでその辺りに落ちている梅干しとかが化石発掘のような感じで出てきてとても面白かったですけれど、それを、麻紐を崩したものと混ぜて、みんなでOBから、それをやりたいという近所の方から小学校のお友達とかみんな来て、みんなで本当にボランティアですね、園に関係ない方も来て、型に入れて、そして3ヶ月ぐらい干して、その日干ししたレンガを積み重ねて竈を作りました。その竈作っているときに近所のおじいちゃんとかも遊びに来たりして、これは俺ら子供の頃よくやったなと言っていました。当たり前だったと言っていました。今だいぶもう古くなってひびが入るのですけれど、小学生が毎月1回来るとそれをまだ土取ってあるので、自分たちでこれ補修するねと言って小学生が補修してヒビを直してくれています。再生可能なかまどです。もちろんピザ釜でピザも焼くのですけれど、粉から私達自分たちで麦取ってきた小麦を石臼で粉にして全部はなかなか大変でできないのですけれど、そういったものでピザの生地も月に何回も作るので、子供たち自分たちでピザも作って、近所の方を呼んで収穫祭を毎年しています。

そして暮らしや行事だけではなく、近辺には里山の大自然が広がっていて、やっぱり荒れているのですすごくそういったところを私達も薪ストーブとかがあるのでスリッパを拾いながら、たきぎを拾いながら散歩して帰ってくるとか、唐沢があってサワガニとかでも遊ぶのですけれど、近くにビオトープもあって、ビオトープではまず図鑑に出てくるようなあの生き物観察をしています。

そしてふるさと公園を使って毎年1回マルシェをするのですけれど、OBも含めると100人ぐらいになるので、そういったイベントをすると公園を貸し切りでマルシェ。手作りのマルシェ、それから子供たちも、手作りはいろいろな手作りが自分たちでできるので、小学生が店を自分たちで担当してやったりしています。

そして小学生クラスでは森の空いているところで毎年ツリーハウスを作っているのですけど、4階建てのツリーハウスをロープワークと、それからリボン結びで作るツリーハウスというので立てて、1日目立てて、2日目遊んで、3日目全部元通りにする

というようなので昨年の夏もしました。

　それから一、二歳児の親子のお散歩会。それから妊婦さんや本当に森のお散歩が好きな子たちを集めて森の散歩をふるさと公園の森とかでしています。今回このアルプス公園の北側の拡張部ということで、私達遠足とか行くとアルプス公園遠足と言うと大抵子供たちは遊具の方に行くかもしれないですけれど、私達は大体北側で集合して、北側から歩いて山の上とかを歩いていくとか、そういったところが子供たち大好きです。

　そういったところの方がワクワクするし、鳥がとにかくたくさんいるのです。北側の方は私、今回この委員になったときに、アルプス公園何回も歩いて北側のところ施設ごとで歩くと、結構使われてないよと言って、かなりの人が言っていました。野鳥の会の方もカメラとかで本当に良い時間帯は野鳥を撮る人で、道が通れないぐらいいました。そういう方たちにアンケートをとって、物を何か乗り物とかで搬入とかした場合に気をつけることありませんかとか、そういう質問を皆さんにしてきました。すると、やはりアルプス公園のあそこの山は、西の山と、東の山のど真ん中で西から渡り鳥たちが南に向かっていく、山に向かっていくときの休憩場所というか。すごくいい場所で、本当に全国で珍しい鳥がこんなに見られるところはないのだと、知っている人は全国で有名だからかなり県外から来ているはずだと、目立たないけれど来ているのですということをおっしゃっていました。それで今のアルプス公園の少し荒れた感じの、影があるところが小さい小鳥たちにはもってこいの場所で、猛禽類の大きな鳥に見られないといったところで大事にしたいということはおっしゃっていました。

　それでそんなお話をたくさん聞いた中で、私達のOBが年6回、昨年6回北側の古民家を使って一応クラフトの会をやったり、子供の手遊びの会をやったり、そのときに不便はなかったかとか、そういったところを少しレポートに出してもらいました。それはまた市の方にもお渡ししているのですけれども。やはり、南側は本当に賑やかで子供がたくさんいて、遊ぶ場所にはもってこいかもしれないけれど、そうじゃないものを求めている人が北側から入ってきてゆっくり散歩をして、そして静かな人がいないところが好きという方たちが利用しているというようなことで、私達のOBが6回やったときもあそこを歩きたいというお母さんたちがやはり集まりました。そして古民家でのんびりお弁当食べるなどというような時間を過ごしたということで、本当はもっと人に知ってもらえたらいいのに、今知らない人が多すぎるといったところで勿体ない、知らなかったという人もたくさんいらっしゃったということなので、そこで6

回古民家を利用してやったグループの方たちはもっと宣伝の仕方で、静かなところでもそれを好む方たちがたくさん利用されるじゃないかという話をされていました。そこで私が提案するのは、最初に「遊んで学んで皆で里山作り」というのがキャッチフレーズだったと思うのです。今も公園サポーターとか、公園ボランティアを募集してということで、今後考えていきたいという中で、やはり私皆さんで研修に行った里山学校、あづみの国営公園でしている里山学校のこれが、私達が最初に幼稚園を作ろうと言ったときに、人集めをするのに何をしようかと言ったときにはこういう里山学校みたいなお散歩会を始めたのです。里山ってこんなに楽しいよ、こんなに利用できるよというところから１年かけて計画を立て、このあづみの国定公園では、山の子教室とか、田んぼの教室、里山生き物教室、案内人の教室。まさにこんなようなところを身内でやって、集まった人たちで、この里山作りしませんかというので、古民家も壁の土壁から何から補修もみんなでやってもらいました。それももうくださいというのに出して、廃業になった旅館のシーツを利用してカーテンを作るなど、そんなようなのでみんなで作ってきたというのがあるので、こういった定期的に年間、こういう予定でやりますよというのがあるとやはり予定をすると思うのです。実際私、小学生クラスで毎月１回年の中で必ず国定公園の中の自然な案内をしてもらうところとか、いろいろな工作をする日があるのですけれど、それを目指して、計画をして小学生を連れてみんなで行っています。利用しているのです。松本市なのに、アルプス公園ではなく、国定公園を使っているというのは、非常にもったいないなというふうに思っていました。何かあそこで使えたらなという、ネックになっているのはいろいろな人が使うのに、場所代がかかるということと、普段フリーでというところを貸し切りで利用するところが予定を立てて、年間でやるのがなかなか難しいのかなとか、そういったところで私どもの園に集まってくるお母さんたちいろいろな方がいます。自営で自然体験活動をやっている先生とか、それからネイチャリングフェスタとかにも私達出るのですけれど、そういったところで自然体験活動をしている講師の方ですとか、乗鞍の山民さんの人に来てもらって一緒に乗鞍歩くなどとかしているのですけれど。松本近辺にも素敵な方たちいっぱいいるのですよね。そして私、ここにこの委員で選ばれたときに、ビオトープの会の高山さんですとか、ひこばえの会の村上さんですか、こんなにいろんな方が言うのだとしたら、みんなで本当に協力して年間計画で、ビオトープで遊ぶ生き物観察があったり、羊毛で遊ぶ会があったり、というのをみんなでやると人集めもしやすいし、そして安曇野市はこういう広告を小学校、幼稚園、本当

にどのくらいの枚数撒いているのかというぐらい、こういう形で冬の公園での遊びから、ちびっこ遊び広場でこんなことやりますというのが、毎回子供たち貰ってきます。幼稚園でも小学校でも中学校でも貰ってきます。なので、これ見ておもしろそう、行ってみようと言うのでやはり私達のところに帰ってくる保護者の方もみんな利用しています。そういったものがアルプス公園にあると本当に利用者が増えるのかなと思うのですれけど。あまり大々的に大人数でイベントというのではなく、北側の静かな感じで、本当に年間通して里山を体験したいなという方たちがのんびり老若男女じゃないですけれど、小さい子供連れのお母さんから、お年寄りの方までが、みんなが利用できるような年間の計画を立てたい、そういう場となるとすごくいい場所になるじゃないかなと思っています。そして具体的にはここアルプス公園の場合には、里山学校では、田んぼの教室が、みのむしの会の方がやっているのだけれども、その協力として、岩原の盛り上げ隊とかが協力しているとか、いろいろなところにいろいろな方が協力しているのですよね。この形というのが、要は公園でいろいろなイベントをする人、今回土田座長が送ってくださった応援サポーターとかのわかりやすい図ですね、公園ボランティアといったところと、それから自然活用委員会というところと、サポーターの申請というのをこの表の中にはあるのですけれども、要はイベントを企画する人たちは今こちらにいる、要は自然活用実行委員の選ばれている委員の方たち、いろいろな技術を持った方たちなので、そういう方たちと計画と、それからイベント等もできるのではないかなといったところで公園をサポートする人と、それからそれを管理運営する人というのは同じでいいじゃないかなというのが私の提案です。

そして、イベントがあって、そのイベントをやれる専門員がいて、専門員の人たちが毎月１回ぐらいに集まってこういった活動を今年はやって来年はどうしよう、やっていくにあたってはどこの整備をしたらいいのか。畑なのか、田んぼなのか、森の整備は、野鳥観察する場合にはどういったところの整備が必要かみたいなところは公園に来ている方たちがいろいろな方を紹介してくださいました。アルプス公園で三郷昆虫クラブの方とか、いろいろな専門医の方がいるので良かったらそういう人たち紹介するよとかというようなお話もいただきました。

そういった方たちと、要は森の整備をするのに、先ほども小山さんのような専門の方、アカシア邪魔だから取るではなく、私達も中草川のアカシアのところで蜂を飼っている方がいるのですけれど、そこへ行って、鉢の巣を湯煎すると蜜蝋が取れるのですけど、その蜜蝋で粘土作っているのです。結構その巣が捨てられていたりとかする

のを利用して、そういった蜜蝋が取れたりとか、それからアカシア、そういった利用の仕方というのがいろいろな方が知っているのです。話を聞きながら伐採とかもしていくといいのかなというふうに思いました。ということでこういったサポーターとボランティアの方を募って、年間通してのイベントができたらなという提案を今回させていただきました。駆け足ですいません。以上になりますが、ありがとうございました。

（発言者：土田）　いろいろな実態を通して子供たちの環境や、その子供たちの教育や、またそのいろいろなその後の発見について。また、各団体等の共同的な活動をしたらどうかというご提案でございました。時間ございませんけれども、ご質問ご意見等ございましたらお願いいたします。

　これで各委員の方々からのご提案につきまして全て終了いたしました。ご意見等いただきました委員の皆様にお礼申しあげます。

～休憩～

（発言者：土田）　第3議題です。提案書のまとめ方について。資料の提言用紙をもとに協議してまいります。事務局にご説明をお願いいただきます。

（発言者：事務局）　事務局渡邊です。皆様には提言用紙、メールでお送りしております。目を通していただいたかと思います。市長に対する提言書の作成につきまして、この用紙をもとに作成していきたいと思っております。簡単に説明します。

　要旨としまして、検討会議の提言を具現化するために実行会議を発足して提案するものです。提言1としまして、テーマを作成します。公園の環境特性や利用形態等に基づいて環境教育、体験学習、健康、癒しの四つのテーマを設定して利活用の促進を図ります。

　これ提言2としまして、キャッチフレーズの確認。キャッチフレーズ、遊んで学んでみんなで里山作り。これは前回の検討会議で提言したキャッチフレーズの継続です。実行会議になっていますが、直していただきたいと思います。そのときに、テーマを決めていまして、提言1にありますが、この四つのテーマをもとに前回キャッチフレーズ作ってまいりました。検討会議で提言したキャッチフレーズをそのまま継続して

いくという流れです。

提言3としまして北側拡張部の名称、生きものふれあいの森、これは先ほど言いましたが、提言と一緒に発表するものでございますので、十分公表については考えていただきたいと思っております。提言を推進体制および管理運営、アルプス公園いきものふれあいの森を市民の遊び学びの場として、利活用を促進するため、市民参加型の共同体制を含め、管理運営体制を整えます。

提言の5番目、自然活用ゾーン。10個のゾーンにつきまして、次のページになりますが、ソフト事業、ハード事業分けて明記していきたいと思っています。ソフト事業の分類。これは四つのテーマに紐づけしたいと思っています。この表がその書き方で重点テーマ、関連テーマ。また、ハード事業としまして短期、それと中長期に分けて明記したいと思います。早急に整備が必要とされる点を中長期にしまして、予算および規模が比較的大きく調整が必要な提言となっております。基本的に、管理運営体制をもとにありまして、その代わりソフト事業、さらにその事業に対しましてはハード事業が紐付けというか、連携つけられて成り立っているというイメージかと思います。

提言6としまして、緑地保全ゾーン。開園当時平成19年、6種保全計画に基づいて次の計画的に行います。今まで19年からほとんど緑地保全計画にのっとった管理が行われていなかったので、ここに来て初めてしっかりとした管理を行っていきたいということです。ただ括弧6、外来草本類の駆除です。実際アレチウリ、セイタカソウ、オオハンモソウ、北側そのあたりにかなり繁茂をしています。当時の緑地保全ゾーンにプラスしましてこういったものを駆除が必要だということで提言していきます。

提言などしまして全体に対する提案です。今まで皆様専門的な部分から提言、かなり深堀した資料をいただきました。これにつきまして、南側の部分、北側当然ですが、南側の部分についても、関連するものがありますので、北側は北側で提言。南側については提案するという形でPR、変な入道、里山再生、公園における体験学習などという形で分類しながら提案し、提案と提言をしていきたいと思っています。

提言の8連携体制作り。括弧1としまして近隣の公園。第2回目に実際に行かせてもらった国営アルプスあづみの公園、烏丸の渓谷緑地です。長嶺山の関係する部分と連携していけばいいかなと。また、公共施設。山博、小鳥と小動物の森。アルプス公園内にありますので、その辺の施設との連携です。市民の博物館など。次福祉施設ですね。3番目として教育機関、市内外の幼稚園、保育園、小学校、中学校、高校、大学です。4番目として研究機関。信州大学、松本大学、松本短期大学、長野県環境保

全研究所となっております。さらに一番大事な近隣の町会、それと6番目に結構出てきましたが、市役所内の各課の連携されていないじゃないかということがありましたので、ここで連携作りとして課題を今年提言としていただきます。
　提言書の他に、資料編、皆様の意見等をまとめたものを掲載していくという考え方で、提言の用紙としたいと思います。

（発言者：土田）　ありがとうございました。提言書の要旨でございます。まだ、性分化されていないのでこれから中身を作っていくことになるわけでございますけれども、全体的な概要といいますか、それにつきまして、質疑あるいは意見交換をしたいと思います。どんなことでも、どの場所でも結構ですので何かございましたらお願いいたします。

（質問者：村上）　提言の 6 番の中身のところで緑地保全ゾーンとあるのですが。(6)のところで外来等トンネルの駆除、アレチウリ、セイタカソウ、オオハンモソウとあるのですけれど。オオハンモソウはどの辺りにあるのでしょうか。
（回答者：土田）　花の丘の野草を植えてあるエリアがあります。そのあたり。今年も確認しています。
（発言者：村上）　まだ見ていないものですから、ありがとうございます。

（発言者：事務局）　作成している中で、揉んでいる中で、自然活用ゾーン、緑地保全ゾーンという名前があります。私ども検討会議、その前からゾーンと、このネットが違うという形では見られたのですが、一般的にどうも二つあるとわかりにくい。自然活用ゾーンというのはどちらかというとエリアじゃないかというご意見もあったので、一般的に見られる方にとってはエリアとゾーンで分けた方がいいじゃないかというご意見をいただきました。
　さらにもう一点、四つのテーマありますが、体験と体験学習は、せっかく四つで出したのだけれど二つあるというのが、どっちかにまとめた方がいいじゃないかというご意見をありまして、それはそれで揉めばいいかなと思います。ここで提案させていただきます。
（発言者：土田）　ただいま提言4と5のところにある自然活用ゾーン、緑地保全ゾーンのあるところでわかりにくい、感覚的に捉えにくいというご意見。エリアにした

らどうか。そこら辺どうしたらいいかというか。体験、体験学習は大きな問題でございませんので、わかりやすくしていただければ結構でございます。

　また、そのエリアとかゾーン区分けとか、言葉の使い方に関して何かご意見ございますか。今までずっとゾーンで、平成 17 年にこの基本計画ができた。それからも使われている言葉でして、現在まで至っておりますけれど、それに基づいて、我々が使ってきた、この提言書にもありますけれど、これにつきまして何か案がございましたらお願いいたします。特に変更をする必要がない場合は結構でございますけれど。

ご意見がないということは現状的にというお話でよろしいでしょうか。

（発言者：事務局）　一般的に見ると少し変えた方がいい。同じ図面に、その地区があった場合、その前にドーンと名前になる場合です。緑地保全ゾーンの上に一応あるのですけれども、場所が。ゾーン分けすると、ゾーンとゾーンでわかりにくいというところはあるのですけれど、なのでエリアに変えていただいた方が説明しやすいのかなとは思います。

（発言者：土田）　例えばその自然活用エリアという言葉になるということですね。緑地保全エリアと。

（発言者：事務局）　自然活用エリアと緑地保全ゾーンです。緑地保全ゾーンはそのままほぼ場所であるエリアの方がわかりやすいのかなという。学術的にというか、そういった部分がなければ表示の方法としてはそういった方が一般の方にはわかりやすいかなというご意見はあります。

（発言者：土田）　どうです。よろしいですか。変えていただいて。

（発言者：事務局）　何か訳があればいいのですが、ただ四つと分けてあるのになんで中に二つあるのだという、ご意見ある。表示の仕方ですけどね。

（発言者：高山）　少し戻るのですが、エリアという表現は私も賛成です。この中に含まれているのが施設と場所と二つある。厳密に言うと。森の架け橋と駐車場が施設。古民家体験施設も施設。それに対してある空間を指している。例えばふれあいの水辺。自然観察の森、そういう空間を指している。厳密に言えばエリアと施設は分けた方がいいのですけれども。そこまで言うと大変なので、エリアでも。

　体験と体験学習ですけれども、私が最初に言い出したのかもしれないですけれど、イメージは体験というのはどちらかいうと大人の方が何かをする、したことないことを試みるというのはそれが体験で、子供たちが体を動かして何かをしながら学ぶとい

うのが学習かもしれません。そういうつもりで区分けをして、そのつもりで分けるのであれば、今のままでもいいですし、体験学習も体験に含まれるなら含めていいですし、この辺はおまかせしたい。
（回答者：事務局）　わかりました。少し意味合いがわからなかったのでちゃんと理由付けができているなら問題ないと思います。

（質問者：高山）　今じゃないのですけれど、提言8のところですけれども、連携体制作りの括弧2の公共施設の他にある、福祉施設とありますけれども、これは市の福祉施設ももちろんあるのですけれども、民間の福祉施設も、老人福祉関係の施設、たくさんありますので、もしかしたら福祉施設みたいなものは分けたほうがいいのかなと。それと、教育機関ですけれども、ここの中学、高校、大学とあります。これ短大も加えていただければと。（提言書（案）には記載がない）松本短期大学も幼児教育とか。一生懸命やっていますので、かなり関わっていると思う。短大も入れていただいて。逆に4番の研究機関は具体的な名称が出ておりますが、その3番が中学、高校、大学という表現になっているのに、ここだけ具体的な名前が出ているのがいいのかどうか少しわかりませんけれども。場合によっては、例えばですけれども、大学、短大、研究機関。そんなような表現でもいいと思います。実際にアルプス公園をフィールドにして、研究行っている東京のコヤクジ？そういったところもあるのできりがないと思います。
（発言者：事務局）　わかりました。あくまで今の要旨でこれから作り上げていく中で、皆さんのご意見、今高山さんのご意見。聞いた中で変えていきたいと思います。
　提言7の方ですけれども、今魅力向上の関係の等ありまして、1に実際のPR内容というのは行っていまして、魅力向上の方です。ただ最後は少しそこの議論されていないので、ここは分けた形で変えていきたいと思っています。

（発言者：土田）　大体ご質問等出尽くしたと思いますので、今後予定につきまして、事務局の方からお話をいただきます。
（発言者：事務局）　提言書の作成につきましては、座長と課長代理と今までの専門的な部分の提案とかありましたので、一部の委員さんを加えながら提言させていただきますよろしいでしょうか
（発言者：土田）　そういう形で性分化に関しましては、座長、座長代理および関係

する委員の方々のご意見いただきながら、作っていくということでございます。
よろしいでしょうか
（発言者：事務局）　当然作った上で、委員の皆様にはメールで確認は当然させていただきますのでよろしくお願いしたいと思います。
　提案書の方、一応の原案を作成した場合は、また皆様方にお送りしてご意見をいただくということになると思いますので、よろしくお願いいたします。よろしいですか。
　ではこの議題は終了させていただきます。
（発言者：土田）　ありがとうございました。以上予定された議事をこれで終了いたします。何か全体を通して改めてご質問等ございましたらご発言をお願いいたします。

（発言者：村上）　私の希望を申し上げて申し訳ないですけれど、実は、今の環境省の生物多様性の戦略の中の続きの中でというか、繋がってきた中でこういう提案もあることを学んだのですけれど、環境省で自然共生サイトという、既にある自然公園とか、国立自然公園、国立とか、国定公園とか、それから都道府県の自然公園とか、自然環境保全地域鳥獣保護区、保護林。それに天然記念物などなどなどその保護区という環境省の中で把握されている保護区というのは、生物多様性の保護区です。つまりそれがまだ 20.5%。本土の面積の 20.5%、それから海洋では 13.3%という範囲でしかないのですけれども、これを 2030 年に向けて両方とも 30%までに保護していくサイトを増やそうという目標がありまして、今保護区といわれるそれ以外の地域というのは、単純に言ってしまって申し訳ないですけれど、地域の人々とか、それから活動している団体とかから、例えば社寺林でもいいし、自治体の関わるこういう都市公園みたいなところなども含めてこの土地の自然を大切にしようという、表明をしていこうという働きかけがありまして、それをぜひアルプス公園にもという。そういう希望というよりも、これ私も突然のことなのであまり上手く説明できないですけれど、提言書の最後の方に、これからの将来的にこういう項目に手を挙げるよというような検討をしていただけたらいいなという思いで、1 行加えていただきたいと思いで、申し訳ありません。私だけの思いなので。1 行を加えていただければと思う、よろしくお願いします。
（発言者：土田）　最近環境省からおっしゃるような提案のような募集出ておりまして、それにアルプス公園も応募したらどうかというご提案ございました。それもこの提言書の中に将来抽象的な中に入れておいていただきたいというご希望でございます。

何か事務局の方からお願いいたします。

（発言者：事務局）　今資料をお配りしましたが、COP15という、環境世界的なものがあります。COP3が京都議定書で二酸化炭素の排出規制でしたが、今、COP15というのが昨年の12月15日から始まっていまして、カナダのモントリオールで行ったそうです。この中で今言ったその保護区を30%にしましょうということで全体決定されました。

今村上さんが言っていましたが、今、国立公園、国定公園、その他諸々自然関係で全部集めても20%だから、10%増やさなきゃいけないので、民間や、市町村、あるいは会社。全部巻き込んでやっていこうということで最終的に自然について調査という部分だったりが義務付けられていたりするようです。ただ先月、先々月に決まったものなので、あんまり環境省としても細かいところまでは決まっていないようですが、インセンティブも出るそうなので、そういった中で、私どもの活動のその先の方に、あればいいじゃないかというのが村上さんの提案です。私どもも今回、北側につきましてはすぐできるわけじゃないですが、考え方を合致していると思われますのでそれはいいのではないかなという。私としては思っていますが皆さんどうでしょうかというご意見です。

（発言者：土田）　資料今拝見したところですので。検討するものはございませんけども。この件に関しましてご意見いただければと思います。

（発言者：高山）　私も大賛成で。私も少し若干これに加わっていまして、今事務局からご説明あった通り、去年の12月に、その前に中国の公明党、去年の12月はモントリオールで生物多様性条約締約国会議というが開催されました。そのときにもいろいろ議論されたのですけれども、いわゆる自然公園なんかでは限界があるので、民地も含めたところで環境を保全していこうというのが自然共生サイト。正式にはＯＥＣＭなんて言いますけども、本来自然するべきところ以外のところでも自然を守っていこうというところがあって、それが都市公園や、企業の民地だったのです。いうことで、これからの海と陸の環境保全する場所を30%にしようというサーティバイサーティっていうのがあります。それも議論されています。環境省は、今、毎年300ヶ所の登録地を増やそうということで制度を始めます。その審査は結構それなりにありますので、現状、アルプス公園は合格しないと思いますが、それに向けていろいろな努力をしていくという村上さんのご提案は非常に大切なことだと思っております。

　それと同時に、いろいろな制度というか、仕組みがありまして、例えば循環型共生圏とか、日本遺産とか、いろいろ制度というかシステムがありますので、そのどこを目指すかというのは今具体的には言わないですけども、そういったことも、獲得できるような場所になっていくという、そういう努力をしていくという、その大きな方向性は非常に大事。それを提案書に具体的に載せるかどうかは皆さんのご意見をということですけども。

（発言者：土田）　高山さんから賛成のご意見がございました。他にご意見ございますか。本当にＨＯＴな資料でございました。すぐどうこうお答えするものではないと思いますけども。先ほど事務局からご説明ありますように、事務局の方でもこの考えがアルプス公園の今後の活動に合っているじゃなかというご意見でした。これを、この提案書の中に組み入れて長期的な観点からいければいいじゃないかというようなご提案ございました。実際これなかなか難しいと言われた。かなり活動をしている既存の団体ですので、これから北側をどうこうしていこうという団体なので即どうこう動けるわけではないですが、

　他にご意見ある方いらっしゃいますか。

（質問者：髙山）　提言書案にある要旨について。提言 1,2 と項目分けせずに要旨にしてはどうか。

（回答者：事務局）　今後作っていく中で検討していきたい。

（発言者：土田）　また時間も押していますので、気がついたところがございましたら事務局の方へご連絡いただいて、修正したいと思いますので、その点はよろしいでしょうか。そういう形ですいません。これもまた先ほどの、資料についてはご意見、あるいはご質問がございましたら事務局の方でお願いいたします。座長のほうでも事務局相談しまして訂正なりさしていただきますので。いろいろご協力いただいた市川さんにはお礼申しあげます。どうもありがとうございました。

　それでは議事の進行、司会を事務局にお渡しいたします。

（発言者：事務局）　会議進行誠にありがとうございました。委員の皆様、長時間にわたり活発な議論、誠にありがとうございました。今後の予定ですが、先ほどありました 3 月 22 日の提言書の提出あります。また今日第 6 回は最後ですが、皆さんも提言

までお付き合いいただくという形ですので、ぜひともよろしくお願いします。

それと、来年度この組織立ち上げのときに、自然活用委員会の方を基本的に実行会議のメンバーから専門的な部分でご意見いただきたいということで編成していきたいと思っていますので、またその際にはご協力お願いしたいと思います。どうもありがとうございました。それでは座長から一言。1年通じて、よろしくお願いしたいと思います。

【座長挨拶】

（発言者：土田）　松本市アルプス公園自然活用実行会議の終了に当たり一言、座長としてご挨拶を申しあげます。

この間、委員の皆様には、お忙しいところ会議の出席や、現地視察、メールでの意見聴取、意見交換、資料の作成など、様々なご意見や、作業をいただきありがとうございました。まだ、残務がございますけども、この度このように充実した提言書の作成までここにつけることができましたこと、厚くお礼申しあげます。

また、事務局の公園緑地課の百瀬課長、渡辺補佐、などまた多くのスタッフの皆さんの支えがなければここまでに至ることができませんでした。また、オブザーバーの皆様には毎回会議にご参加をいただき、有意義なご意見をいただきました。ここで厚く御礼申しあげます。また何かと市長さんとの折衝に当たっていただき、会議の遂行を支えていただいた、総合戦略局の近藤室長をはじめ皆様方にも厚く御礼申しあげます。

今後提言に沿って組織が立ち上がり、公園の運営管理がスムーズに具現化され、またさらに北側の発展するように期待しております。心もとない座長をさせていただき大変お世話になりました。皆様のご健勝をお祈りして、ご挨拶といたします。どうもありがとうございました。

【室長挨拶】

（発言者：近藤室長）　総合戦略室の近藤聖でございます。雪がしんしん降る中お帰り心配なところありますが、若干私挨拶させていただきますので今もう少しお付き合いいただければと思っております。

本来であれば、建設部長の前澤からご挨拶すべきところでございますが、今日別の公務がありまして、私の方から代わってご挨拶させていただきます。本当に土田座長をはじめ委員の皆様には、昨年度の検討会議から2年ということもございまして、本当に今年は烏川渓谷とか、国営アルプスあづみの公園ですか。現地を連携体制の視察、こういったことも含み合計6回ということでそれぞれのお立場で様々なご意見をいただきました。本当にまた熱心にご尽力いただいたこと改めて厚くお礼申しあげます。

また本日もで、学習会ということで本当に皆さん積極的に知識を吸収しようとされる姿に集まった本当に頭が下がる思いでございます。

さて先ほどこのキャッチフレーズ、去年決めた、遊んで学んでみんなで里山作りこのキャッチフレーズのもとに、自然活用、ご提言書ができつつあるというところでございます

3月には市長への提言があるとお聞きしておりますが、まさにこれがゴールではなくて本当にスタートであるというふうに認識しております。提言の内容にさせていただく中では、ハード整備、ソフト事業それからPRとかそういったことを同時に平成19年度からの開園当初から検討されてきました、市民参加型の協働体制。今度はこれがしっかりとうまく具現化されていくこれが肝ではないかなというふうに感じたところであります。我々松本市も、この提言の実行に向けて取り組んでまいりますので今後とも引き続き皆様の協力とご尽力をお願いしたいというふうに思っております。

また今同時に進めております魅力検討会議。こちら今年の6月が市長への提言という予定をしております。この二つの提言が、車の両輪となってより良いアルプス公園なっていけばいいかなと思っております。

また、3月末にはアルプス公園のフォーラム。市民の皆さんに来ていただいて少しフォーラムというようなものも計画してございますので、ぜひ皆様にもまたご参加をいただければなと思っております。少し長くなりましたが委員の皆様のお礼のご挨拶をさせていただきます。

本当にどうもありがとうございました。